



信金中央金庫  
SHINKIN CENTRAL BANK

地域・中小企業研究所

ニュース&トピックス No.2021-83  
(2022. 2. 28)

〒103-0028 東京都中央区八重洲 1-3-7 TEL. 03-5202-7671 FAX. 03-3278-7048  
URL <https://www.scbri.jp> e-mail : [s1000790@facetoface.ne.jp](mailto:s1000790@facetoface.ne.jp)

## 東濃信用金庫とコメダ珈琲のコラボ店舗について

名古屋支店 森川 高彰

### ポイント

- 東濃信用金庫<sup>1</sup>（以下「同金庫」という。）は、地域の活性化に資する取組みとして旧土岐市駅前支店を新築移転し、コメダ珈琲店（以下「コメダ」という。）を併設した土岐中央支店<sup>2</sup>（以下「同支店」という。）として、2021年4月にリニューアルオープンした。
- 同支店所在地である土岐市では、市内商店街の店舗廃業が続き、かつての賑わいが失われつつあった。かかる状況下で、旧店舗の建替えに際し、土岐市駅前商店街連合会からの要望もあり、商店街の入口に位置する同支店の立地を活かしたカフェとのコラボ店舗を企画するに至った。
- 店内は、両店舗のカウンターが別々にあるものの、待合スペースと喫茶スペースを共有しており、仕切りもなく自由に行き来できる。同支店は、厨房とカウンター部分のみコメダに賃貸している。
- コラボ店舗の営業開始後、同支店への来店客数および取引顧客数は、前年同期比で増加しているなど集客面で効果が見られたほか、顧客からも新店舗について好意的な声が寄せられている。

### はじめに

同金庫は、「地元と共にあり、共に栄える」を経営理念とし、2021年度からスタートした中期経営計画においては、地域、顧客、職員、金庫の「四方よし」の前提のもと、地域や顧客の課題解決に注力している。本稿では、人口減少等により地域経済の縮小が進む中、地元商店街をはじめとした地域の活性化を目的とし、全国初のコメダ併設店としてリニューアルオープンした同支店の取組みについて紹介する。

### 1. コラボ店舗取組みの背景・経緯

同支店所在地の土岐市は、人口 56,985 人（2021年3月末時点）で美濃焼の生産が盛んな地域である。しかし、直近5年間で人口が4.8%減少しており、少子高齢化が進行している。2020年に土岐市駅前広場の整備が実施されたものの、近隣の商店街は、店舗の廃業が続き、賑わいが失われつつあった。

かかる状況下で、旧土岐市駅前支店の建物は、築60年と老朽化しており、建替えのタイミングにあった。同金庫は、店舗を「地域コミュニティ」の拠点として位置付けている。そのため各地域の状況や取引顧客等のニーズに合わせた、地域の活性化にも資する店舗づくりを目指

す意向を持っていた。

そこで、2018年9月に、土岐市駅周辺に位置する駅前商店街の振興組合と中央商店街の振興組合が発足した「土岐市駅前商店街連合会」の役員会において、旧支店の移転と前述の意向について説明したところ、他の会員から賛同の声が集まった。話題性も考慮して飲食店等とのコラボ店舗を建設してほしいとの要望があったため、検討の末、コメダをコラボ先として選定することとなった。



### 2. コラボ店舗の概要

同支店は、土岐市駅前商店街の入口に位置しており、土岐市駅から徒歩で約5分と比較的好立地にある。同支店の存在は、既に地域には十分認知されていた。そのため、今回の建替えにあたっては、コメダ側の集客を意識し、車通りの多い大通り側に同金庫ではなくコメダの店

<sup>1</sup> 2021年3月末時点の同金庫概要は以下のとおり。

本店所在地：岐阜県多治見市、預金量：1兆1,560億円、貸出金：5,645億円、店舗数：56店舗（うち出張所4店舗）、従業員数：830人

<sup>2</sup> 同支店は、職員16人、ATM2台、ローカウンター4か所、タブレット操作によるセルフカウンター1か所を設置している。

舗を配置した。立て看板の存在も含めて、コマダが目立つ配置となった。

店内は、両店舗のカウンターが別々にあるものの、待合スペースと喫茶スペースを両店舗で共有しており、仕切りもなく自由に行き来できる<sup>3</sup>。そのため、同金庫の来店客は窓口での手続き等で待ち時間がある場合、コマダを利用することでその時間を有意義に過ごすことができるようになっている。また、同支店はコマダに厨房とカウンター部分のみを賃貸している。

コマダ側の内装については、コマダの一般的なデザインを踏襲しつつも、ボックス席ではなく、同金庫の金庫章である「3つの円」をモチーフにした席配置となっている。店内のフリーWi-Fiを利用する際には、同金庫ホームページが最初に表示される仕組みになっているなど、コラボ店舗ならではの工夫が見られる。また、壁面に設置したギャラリーには、美濃焼の生産が盛んな土地柄にちなんで、地元の陶芸作家の作品が展示されている。



オープン後のコラボ企画として、コマダのコーヒーチケットの半券を同支店窓口を持っていくと粗品がもらえるキャンペーンを実施した。また、同金庫の預金商品等のキャンペーンの実施時には、コマダのカウンターでフードやドリンクを受け取る際にキャンペーンチラシも併せて配布してもらうなど、双方に無理のない範囲で営業協力を行っている。

当初は、金庫側の宣伝効果をより高めるべく、

コマダ側に金庫の宣伝用デジタルサイネージや各種宣伝用チラシを座席や壁面付近の各所に配置することも検討されていた。しかし、今回のコラボ店舗の企画は、地域住民に居心地のいい空間を提供し、地域に賑わいを創出することが一番の目的であるため、それを阻害しかねない過度な広告宣伝は控えるようにしている。

### 3. コラボ店舗の実施効果

リニューアルオープン以降の半年間で、同支店の1日当たりの来店客数は前年同月比で平均30%以上増加し、店内は以前よりも活気づいている。顧客数も前年同期比で約4%増加している。コラボ店舗の物珍しさからか、今回のリニューアルオープンをきっかけとした、多くの新規顧客来店に繋がっている。

来店客の反応は、総じて好評であり、待ち時間にカフェが利用できるという利便性や店内の明るい雰囲気の魅力を感じているとの声が多く聞かれている。

また、コマダ側にとっても、今回のようなコラボによる出店は、初期費用やランニングコストを抑えることができるというメリットがある。なお、売上面においても、立地等個別事情による面もあると推察されるが、他店よりフードメニューの注文が多いため客単価が高いという傾向があるほか、1日当たりの来店客数も安定している。高齢者の来店客が多い傾向にある他店に比べ、勉強をしている学生やPCを用いて仕事をしている人、打合せに利用している人など、比較的幅広い客層が来店する傾向が確認されている。

### 4. 今後の展望

近年、来店客数の減少に伴い、金融機関の店舗の存在意義について再定義し、従来の業務運営のみならず、他業態とのコラボに活路を求め金融機関は増えている。コラボによる直接的なメリットとして、賃貸に伴う収入増が挙げられるが、同金庫にとってそれは副次的なものであり、地域経済の活性化こそが最大の目的であると位置付けている。

今回のような飲食店とのコラボ成功の可否は、店舗の立地等、地域性によるところが大きく、どの店舗でも同様の効果が得られるわけではない。そのため、今後同金庫では、他店の建替えの際には、必ずしも同様のコラボにこだわるつもりはない。地域の特性に応じて、どのような店舗がその地域の活性化に最も効果的かを検討することが肝要であると考えている。

以上

<sup>3</sup> 同金庫の営業時間終了後は、シャッターが下りるため、来店客はコマダ側と同金庫ATMのみが利用できる。